

Nairātmāparipṛcchā
—梵藏漢合璧本及び訳注—

無我義經研究会

研究会班員	加納和雄（駒沢大学講師）	倉西憲一（大正大学総合仏教研究所主任研究員）
	壬生泰紀（龍谷大学非常勤講師）	桑月一仁（龍谷大学大学院研究生）
	Vo Thi Van Anh（ベトナム仏教大学講師）	道元大成（龍谷大学大学院博士課程）
	北山祐誓（龍谷大学大学院博士課程）	

はじめに

本稿は、梵文写本にもとづいて *Nairātmāparipṛcchā*（『無我義經』）の再校訂を目指すものである。同書は、大乘教徒と異教徒とが無我について問答を展開するテキストであり、かつて Sylvain Lévi が、ネパールの梵文写本にもとづいて梵文校訂テキストを発表している。そして本書には、漢訳が2本存在する（法天訳および日称等訳、いずれも11世紀頃）が、このうち日称等訳において、「馬鳴集」による作品とされることから、馬鳴が関与したテキストとして Lévi は注目した。ただし、実際には、その内容からすると、『ブッダチャリタ』の作者としての馬鳴の手になる作ではないようである。

本稿では、まず、本書に関する先行研究をまとめ、諸本の間にもみられるテキスト上の異同を吟味し、そのうえで、Lévi が使用しなかった梵文写本（NGMPP A936/11）を用いて、梵文テキスト再校訂を行う。さらに梵文テキストにあわせて、チベット語訳（以下、藏訳）、梵文和訳、漢訳2本のすべてを見開きのかたちで提示した、合璧本の制定を行う。それによって、本書のテキストについて決定版の提示をめざす⁽¹⁾。

⁽¹⁾2017年春季、龍谷大学における仏教經典の梵文写本の研究会を計画していた折、ちょうど共著者の倉西氏から本書の梵文写本の存在を知らせて頂いたことが機縁となり本稿の執筆につながった。貴重な資料提供にご協力いただいた倉西氏に心より謝意を表したい。

先行研究

Nairātmapariṣcchā の研究は、すでに 19 世紀から存在する。以下、時間軸に沿って本書の研究史を概観しよう。

Feer [1883] による蔵文仏訳

1883 年, Léon Feer は *Annales du Musée Guimet* において, 「カンギュルからの抜粋の集成 (Fragments extraits du Kandjour)」と題して, 幾つかのテーマに応じてカンギュルからの作品を任意に選び出して, 仏語訳を発表した。そのテーマの一つ, 「教理 (dogme)」の項目に 10 の経典を挙げ, その中の第 10 番目に, 無我を説く経典の一例として本書 *Nairātmapariṣcchā* の蔵訳をとりあげ, その仏語訳を発表した。

常盤 [1905] による紹介

常盤大定は, 馬鳴 (1–2 世紀頃) の小著 4 篇の一つとして日称等訳『尼乾子問無我義経』の内容を紹介した。二諦への言及が見られる本書が龍樹 (150–250 年頃) の「無所有中道」の先駆をなすものであるならば, 仏教史上看過できないと指摘し, 馬鳴が二諦説に言及した可能性を残した。

Lévi [1928] による梵文校訂と仏訳

Sylvain Lévi は, 「Aśvaghōṣa 再考 (Encore Aśvaghōṣa)」と題する論文の中で「Aśvaghōṣa と *Nairātmyapariṣcchā*」という章を設け, 梵文原典をネパール写本の小束の経帙の中から見つけ出して翻刻し, その仏訳を行った。Lévi は, この梵文テキストに対応する類本として, Feer が訳した蔵訳に加え, 本書に対応する漢訳 2 本, つまり日称等訳『尼乾子問無我義経』, 法天訳『外道問聖大乘法無我義経』の存在を明らかにした。その漢訳 2 本の内, 日称等訳では本書が馬鳴に帰されていることに注目して, 著者に関する問題を提起した。同論文は, 『無我義経』の梵漢蔵を含む類本を網羅した, 初めての本格的な研究である。またこの梵文テキストが, その後の研究の基礎的なテキストとされることになる。本稿の梵文校訂テキストにおいても, Lévi のテキストを対校の対象として用いた。

Mukhopadhyaya [1931] による蔵文校訂及び還梵

1931 年, Sujitkumar Mukhopadhyaya は, Visva-Bharati Studies より *Nairātmyapariṣcchā* と題した蔵文・梵文のテキストを発表した。同氏は序文において, 本書の内容や, 現存する資

料を紹介し、また先行する Feer による蔵訳からの仏訳を批判的に取り上げた。同論文に掲載されているテキストは、蔵訳（ナルタン版）のローマ字化テキストと、この蔵訳から還元を試みて作文した想定梵文テキストと、Lévi の梵文テキストの再録である。梵蔵間における読みの異同について注記する。しかしながら Lévi による梵文テキスト刊行を知らず、あえて蔵訳からの還梵テキストを掲載している点は、夙に de la Vallée Poussin が指摘しているように（後述）、奇妙である。既に Lévi 本が存在する以上、よほど特別な状況でなければ、還元梵文テキストを使用する意味はなかろう。

櫻部 [1932] による蔵文和訳

1932 年、櫻部文鏡は、『佛教聖典叢書』の第 10 分冊として本書の蔵文和訳を発表した。蔵訳の底本としては北京版を用い、ナルタン版とデルゲ版も参照したようである。すでに刊行されていた梵文テキストを参照しなかった理由については明かしていない。その解題においては、上記の先行研究に言及し、諸本の書誌情報を紹介する。また梵蔵の両本が、日称等訳に近いことを指摘している。

泉 [1932] による法天訳『外道問聖大乘法無我義経』国訳

1932 年、泉芳璟は『国訳一切経集部第 15』において、法天訳『外道問聖大乘法無我義経』の書き下しを提示した。上記の先行研究に言及し、訳者法天について紹介する。梵蔵両本の書誌情報は、櫻部文鏡のそれに委ねている。

中野 [1934] による日称等訳『尼乾子問無我義経』国訳

1934 年、中野義照は『国訳一切経論集部第 2』において日称等訳『尼乾子問無我義経』の書き下しを掲載した。上記 4 者の先行研究に言及し、訳者日称等について紹介する。日称等訳は本書を「馬鳴菩薩集」とするが、その根拠については不明であると述べる。

de la Vallée Poussin [1934] による Mukhopadhyaya に対する書評

de la Vallée Poussin は Mukhopadhyaya の還元梵文テキストに関して、Lévi の写本に基づく梵文テキストが直前に出版されているにも関わらず、その蔵訳からの還梵テキストを掲載していることについては疑義を呈しつつ、その労をねぎらっている。

Vaidya [1961] による梵文テキスト

ここには P. L. Vaidya が選出した 22 の大乘經典の梵文テキストが収録されている。その中の第 14 番目に仏教教理の特に無我について紹介する意図のもと、本書を収録している。しかし、本書の先行研究や書誌情報については、序文においては詳しく述べられていない。テキストの内容から判断するに、同テキストは新規の校訂本ではなく、ただ単に Levi 本をそのまま再録したものである可能性が高い。

Bhattacharya [1966] による批評

1966 年, Biswanath Bhattacharya は、馬鳴に帰される本書についての批評を発表した。論文の前半は梵漢蔵の書誌情報を列挙する。後半はテキストの内容を要約し、最後には、本書が馬鳴に帰されることは、日称等訳以外には支持されず、疑わしいものであると結論づけた。

金倉 [1966] による紹介

1966 年, 金倉円照は、馬鳴に帰される作品を順次紹介し、その第 11 番目に本書を挙げる。書誌情報と先行研究を概観した後に、次のように述べる。「おそらく、最初契経の形で伝わっていたのだが、後に馬鳴に付託されるに至ったものと解せられる。」(金倉 [1966: 36])。

Fallick [1999] による梵文英訳

1999 年, Eric Fallick は、Lévi の梵文校訂テキスト (Lévi [1928: 209–211]) を底本として英訳を行う。翻訳にあたっては、随時 Mukhopadhyaya [1931], Vaidya [1961] を参照している。

テキスト諸本について

Nairātmapariṣcchā には梵文テキスト、蔵訳 1 本、漢訳 2 本が伝存する。以下、各テキストについて概要を示す。

梵文テキストとネパール写本 NGMPP A936/11

梵文テキストは、先行研究において Lévi の校訂本が基礎資料として用いられてきた。しかしながら、Lévi が校訂本を作成する際に用いたネパール伝存の写本のほかに、彼が校訂に用いなかった別のネパール伝存の写本が存在することが判明した。両写本は、テキストの欠損箇

所を共有していることから、同系統のものとみられるが、しばしば異なる読みを呈しているため、本稿では、この Lévi の校訂本と、彼の未使用の写本を校合して、新たな校訂本の制定を試みる。

なお Lévi が使用した梵文写本については、確たる情報はない。彼はただ、次のように記すのみである。"J'ai reconnu récemment l'original sanscrit correspondant dans une liasse de petits textes recueillis au Népal; il y porte le titre de : Mahāyānanirdeśe Nairātmyaparipṛcchā" (Lévi [1928: 208–209]). 彼の使用した梵文写本と本稿で使用した梵文写本が異なるものであると判断した根拠は、彼の校訂本と対照した際に異読が確認されたことによる。

Lévi に使用されなかった梵文写本は、小部の作品を複数含む、いわゆる集成本の中に見出されるため、まずこの集成本について概観したい。

それは NGMPP A936/11 (=NAK3/693)⁽²⁾の整理番号が付される小作品を複数収録する、梵文集成本である。109 葉からなり、大きさは 18.3 cm × 4 cm、写本の素材は貝葉である。写本の文字は、中世のネパール文字、およそ 13–15 世紀頃によく使用されていたものと一致する。この写本に記されるネパール歴 566 年（西暦 1445 年頃）の年代表記とも一致する。

この集成本には、確認できる限りで、およそ 35 点のテキスト⁽³⁾が収録されており、そのほとんどがインド後期密教文献である。紙幅の関係上、すべてを紹介することは出来ないが、いくつか興味深いものを紹介したい。

『無我義経』と同じ大乘仏典では、八千頌般若の注釈であるカンバラ著『九偈 (Navaśloki)』が収録されており、これら二つ以外は密教文献である。さらに、この集成本の全体を見渡すと、いくつかの例外もあるが、インド後期密教の一潮流であるサンヴァラ系の文献を意図的に集めたものであることがわかる。また、「自加持 (svādhiṣṭhāna)」「遷移 (utkrānti)」といったインド後期密教の重要なトピックについて説かれている箇所を、サンヴァラ系文献から抜粋して書写している箇所もあり、当写本の書写者のうち幾人かは学僧であったと推測できる。例えば、「遷移」を主題とする『サンヴァローダヤタントラ』の注釈書『善教説随從 (Sadāmnāyānusārīṇī)』第 19 章のみ抜粋の形⁽⁴⁾で書写している。

このような傾向を持つ写本断片集はいくつか存在しており、おそらく学僧が特定のトピックについて学ぶことを目的に様々な文献の中から関連する章や節を抜き出して書写・研究してい

⁽²⁾NGMPP = Nepal German Preservation Project, NAK = National Archives of Nepal in Kathmandu.

⁽³⁾NGMCP Wiki (<http://ngmcp.fdm.uni-hamburg.de/mediawiki/index.php/>) によれば、22 の文献が収録されていることと収録テキストがそれぞれ簡単に紹介されている。ただし、管見の及ぶ限り、10 ほど見落としているテキスト（未同定の断片も含む）も存在するので、おそらく約 35 の文献がこの写本に収録されている。

⁽⁴⁾テキストの始まりに「聖サンヴァローダヤタントラの注釈書に曰く (śrīsaṃvarodayatantrasya ṭippaṇīm āha)」, 最後に「以上、19 章注釈 (iti ūnaviṃśa[tiṭama]paṭalavyākhyā)」とあり、「遷移」を主題とする第 19 章のみ抜粋していることがわかる。この注釈書はほぼ完本の写本が存在しており、文献名や内容に関しては、Kuranishi [2012] を参照されたい。

たことがわかる重要な証左であるといえよう。

この集成本の中に含まれる『無我義経』は、およそ都合 3 葉半からなり、第 18 葉表面から第 21 葉表面の間に筆写されている。各葉には 6 行ないし 7 行の文字列が含まれる。

蔵訳テキスト

本書の蔵訳テキストには以下の一本が存在する。

Rin chen bzang po' Kamalagupta 共訳
'Phags pa bdag med pa dris pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo
 (Āryanairātmaparipṛcchā nāma mahāyānasūtra)
 訳経年 976–1055 年頃

本書は Rin chen bzang po⁽⁵⁾がカシミールに最初に入った 976 年から、その没年 1055 年までの間に Kamalagupta と共訳したものであり、カンギュルに収録される。同二者が共訳したテキストには、本書以外に 9 点存在し、いずれも密教関係の作品である⁽⁶⁾。本稿に提示する蔵訳テキスト並びに異読は『中華大蔵経』⁽⁷⁾のそれを転載した。版本・写本間の異読を提示する際には、下記の略号を使用した⁽⁸⁾。

D: <i>sDe dge edition.</i>	P: <i>Peking edition.</i> (乾隆版)
N: <i>Narthing edition.</i>	C: <i>Cone edition.</i>
Y: <i>g-Yung los edition.</i> (永樂版)	Li: <i>Li thang edition.</i>
Kh: <i>Khu re edition.</i>	Zh: <i>Zhol edition.</i>
H: <i>Lhasa edition.</i>	S: 中華大蔵経

漢訳テキスト

Nairātmaparipṛcchā の漢訳は以下の 2 点が現存する。

1. 法天訳『外道問聖大乘法無我義経』一卷 (T. 17, no. 846) 訳経年 986 年
2. 馬鳴菩薩集・日称等訳『尼乾子問無我義経』一卷 (T. 32, no. 1643) 訳経年 1063 年 (進呈)

『外道問聖大乘法無我義経』は 986 年に法天 (*Dharmadeva, 1001 年没) によって翻訳さ

⁽⁵⁾ Rin chen bzang po については、川越 [1981][1982][1983] を参照。

⁽⁶⁾ *Mañjuśrījñānasattvasya paramārthanāmasaṅgīti* [D360, P2], *Śrīcatuṣpūṭhayogatantrasādhana* [D1610, P2481], *Tattvopadeśa* [D1632, P2504], *Tattvopadeśavṛtti* [D1633, P2505], *Śrī-paramādīṭikā* [D2512, P3335], *Ārya-mañjuśrīnāmasaṅgīṭikā* [D2534, P3357], *Arapacanasādhana* [D3311, P4132], *Vimalaprasānottararatnamālā-nāma* [D4333=4499, P5825], *Saptaguṇavivarāṇakathā* [D4548, P5462].

⁽⁷⁾ 『中華大蔵経』中国蔵学研究中心大蔵経対勘局対勘編輯, 2008 年, 第 60 卷。

⁽⁸⁾ 略号並びに各本については、ツルティム・伴 [2010] を参照した。

れた漢訳である⁽⁹⁾。法天は中インド出身で、973年に訳経僧として宋に入る。982年より太平興国寺の訳経院に移り、そこで天息災（後に法賢、1000年没）や施護（*Dānapāla, 生没年不詳）とともに多くの密教文献の翻訳に従事する。本書のような異教徒に言及する典籍の翻訳に法称造⁽¹⁰⁾『金剛針論』一卷（T. 32, no. 1642）がある⁽¹¹⁾。主要な版本である高麗版、宋・元・明の3本、宮内庁本、金版⁽¹²⁾には、本漢訳が入蔵されている。

もう一つの漢訳『尼乾子問無我義經』は日称等によって1063年までには訳出されたと考えられる⁽¹³⁾。冒頭に「馬鳴菩薩集」とあり、この漢訳の原典が馬鳴による編集であったことを伝えている。代表で名前が挙がっている日称（*Sūryayaśas / *Sūryakīrti, 1027–1078年）はインド出身の訳経僧で、1046年に宋に入る。彼もまた法天と同じく太平興国寺の伝法院（旧名：訳経院）で訳経に従事していたことが知られている⁽¹⁴⁾。日称が翻訳に携わったとされる漢訳は計8本現存するが、その内の『事師法五十頌』一卷（T. 32, no. 1687）、『六趣輪廻經』一卷（T. 17, no. 726）、『十不善業道經』一卷（T. 17, no. 727）の3本は本漢訳と同じく馬鳴が編集したものとされている⁽¹⁵⁾。本漢訳は高麗版には入蔵されているが、宋・元・明の3本、宮内庁本、金版には入蔵されていない。なお本稿に提示する漢訳テキスト並びに校異は『大正新脩大藏經』のそれを転載した。

諸本の間にみられる経題・内容の異同について

（経題について）

経題については諸本の間に異同がある。梵文テキストは *Mahāyānanirdeśe nairātmaparipṛcchā* とし、蔵訳は *Āryanairātmaparipṛcchā-nāma-mahāyānasūtra*（'Phags pa bdag med pa dris pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo）とする。法天訳は「外道問聖大乘法無我義經」

⁽⁹⁾ 『大中祥符法宝録』の雍熙3年7月の項目に本漢訳の名が挙がっていることから986年に翻訳されたことが知られる（『中華大藏經』73, no. 1675, 430）。

⁽¹⁰⁾ 漢訳の伝承では Dharmakīrti とされているが、梵文テキスト *Vajrasūci* では作者は馬鳴に帰されている。

⁽¹¹⁾ 法天については志磐撰『仏祖統紀』（T. 49, no. 2035）や贊寧等撰『宋高僧伝』（T. 50, no. 2061）に詳しい。なお『仏祖統紀』には「法天改名法賢」（399c7）とあることから法天と法賢とは同一人物であるとする説があるが、後で紹介する成尋撰『參天台五台山記』（『大日本仏教全書』第115巻所収）には法天と法賢が並列で登場するのでその説は誤りであろう。

⁽¹²⁾ 高麗版・金版所収の本漢訳については『大正新脩大藏經』所収のものとの異同は見られない。ただ本漢訳の前に「大宗新訳三藏聖教序〔經〕御製」と題した序文が置かれている（『高麗大藏經』33, no. 1128, 1053ab; 『中華大藏經』63, no. 1240, 990bc）。

⁽¹³⁾ 『參天台五台山記』には「『六趣輪廻經』一卷、馬鳴菩薩集。『事師法五十頌』一卷、馬鳴菩薩集。『尼乾子問無我義經』一卷、馬鳴菩薩集。日称三藏訳。嘉祐八年進。」（『大日本仏教全書』115, 461a12–15）とあり、嘉祐8年（1063年）には翻訳が終わり献上されていたことが知られる。

⁽¹⁴⁾ 日称については『參天台五台山記』より情報を得ることができる。成尋は1072年に入宋した平安後期の天台僧で、同書には日称と交流があったことが記されている（cf. 藤善 [2006: 371–401]）。

⁽¹⁵⁾ なお元代に作成された慶吉祥等集『至元法宝勘同総録』（『昭和法宝総目録』（大正新脩大藏經別巻）第2巻所収）では、これら4つの日称等訳を「馬鳴菩薩造」として伝えている（235b12–19）。

と、日称等訳は「尼乾子問無我義經」としている。

タイトルについては、梵文写本の奥書が *nairātma-* とし、本文冒頭部にも *nairātmapraśnaṃ* という語形が出ており、また蔵訳冒頭の音写もそれを支持するため、この語形を採用する。ただし本文の第 19 偈には *nairātmyaṃ* とあり、通例でも *nairātmya-* という表現がより一般的であり、また Lévi 本もその読みを採る点は注意されたい。

梵文テキスト・蔵訳が単に「無我の問い」としているのに対し、両漢訳ともに、本書が異教徒（外道／尼乾子）との問答であることを明確にした経題になっている。また法天訳には「聖大乘法」という無我を形容する語が確認される。おそらくこの語は法天による補いと考えられるが、梵文テキストの尾題に見られる *mahāyānanirdeśe*（大乘の説示における）の訳の可能性もある。

（梵文テキストと蔵訳との異同）

第 4 偈、第 5 偈に関しては、蔵訳のみに確認できる偈頌が 4 脚分（蔵訳テキスト参照）あり、逆に、梵文テキストのみに見られる偈頌は 1 脚分（5e）ある。また、蔵訳においては、第 9 偈の後に梵文テキストに存在しない 1 偈があり、その偈は法天訳にも存在する。蔵訳の第 25 偈は、梵文テキストと一部において一致せず、第 26 偈に対応する蔵訳は存在しない。また、梵文テキスト・両漢訳に存在する「歡喜奉行」の文言は、蔵訳にのみ欠如している。

（梵文テキストと両漢訳との異同）

漢訳 2 本の中から、まずは法天訳の特徴について述べる。本書は、無我に関する問答が骨格をなし、梵文テキストと蔵訳と日称等訳の 3 本において、その問答は大乘教徒と異教徒との間で行われる。しかし法天訳のみは、仏と異教徒との間の問答としている。

また本書の冒頭では、梵文テキストなどは直ちに異教徒による無我に関する質問から始まるのに対し、法天訳のみ「如是我聞。一時佛在大衆中」という經典冒頭の定型表現から始まる。この点から法天訳は、本書を經典として理解していたようである。

經典の後半では、他の諸本が偈頌でもって二諦や菩提心について説くところを、法天訳のみ散文でもって説示している。

そしてその最後には他とは内容的に対応しない以下のような文言が確認され、密教的な観法の次第が記述されている。

專精觀行決定成就。若與眞如不相應者，應念眞如呪及金剛鈴眞如無生印。而起眞如相應之行，決定圓滿如上功德。

【試訳】 努め励んで〔菩提心を〕修習すれば、必ずや成就を得る。もし、〔その行者が〕眞如と上手く結合することがなければ、眞如の呪（「非眞如呪」を「眞如呪」と読む）と

金剛鈴と真如無生印を念じるべきである。このようにして、真如と結合する修行に着手するならば、必ずや上記のような功德を円満するだろう。

さて、一方の日称等訳に目を向けると、法天訳に比べて、梵文テキストとよく対応していると言える。しかし、次のような相違も確認される。すなわち、本書の中盤に位置する【一切はまぼろしのごとし】の箇所に対応する教説は、日称等訳にのみ欠如している。また末尾の箇所では、梵文テキストや法天訳と同じく、諸經典の定型表現である「歡喜奉行」に関する記述が確認されるが、他の諸本がそれを散文で記すのに対して、日称等訳のみはそれを偈頌で記している。

凡例

以下に提示するのは、*Nairātmapariṣṣchā* の梵文校訂テキストとその和訳である。梵文校訂テキストは、梵文写本 NGMPP A936/11 (fol. 18r1–21v5) を底本とし（以下 Ms）、Lévi 本（以下 L）及び Vaidya 本（以下 V）を参照したもので、各々のロケーションについても提示した。さらに、蔵訳（S vol. 60, 14–19, D No. 173, 5b1–7b4, P No. 840, 5b6–8a3）及び漢訳 2 本（T. 17 no. 846, T. 32, no. 1643）を見開きの形で提示した。蔵訳は『中華大蔵経』の活字本をそのまま転写し、『中華大蔵経』及び D, P のロケーションを提示した。漢訳は、『大正新脩大蔵経』の活字本をそのまま転写した。ただし、蔵訳、漢訳の異読の掲載について、本稿訳者が不要と判断したものは適宜報告せずに割愛した。

梵文テキストにおいて、以下の異読は掲載しない：分節記号の添削、写本特有の綴り字、連声の標準化、アヴァグラハ等。また、蔵訳テキストにおいて、以下の異読は掲載しない：分節記号の添削、'ang と yang の異読、pa と ba の異読等。なお、梵文テキストにおける異読は、ポジティブの形で提示したが、蔵訳テキストにおける異読は、『中華大蔵経』に準じてネガティブの形で提示した。

梵文テキストの偈頌には通し番号を付した。諸異本においては順序が入り乱れていることがあり、また散文の場合もあるため、各々に梵文テキストの通し番号を当てることによって、諸異本との対応関係を明示した。

和訳において、角括弧 [] は、文脈上訳者が補った文言を示し、丸括弧 () は、訳者の解説文を示す。

以下、左頁上段には梵文テキスト《Skt.》、左頁下段には蔵訳テキスト《Tib.》、右頁上段には《梵文和訳》、右頁中段には《法天訳》、右頁下段には《日称等訳》をそれぞれ配置した。

科文

【帰敬】

【我が有無を問う】

【我が有る場合の誤謬の指摘】

【我が無い場合の誤謬の指摘】

【身体を支えているものは何か】

【一切はまぼろしのごとし】

【二諦】

【偈頌】

【k. 1 二諦の総説】

【kk. 2-10 世俗と輪廻】

【kk. 11-18 菩提心】

【kk. 19-23 一切諸行及び心はまぼろしのごとし】

【kk. 24-26 涅槃の獲得】

【歡喜奉行】

【奥付】

《Skt.》 Ms18r1, L209.7, V-:

[18r1] [L209] om̐ namo buddhāya // ¹

¹ om̐ namo buddhāya] Ms, namo buddhāya L, om. V.

《Tib.》 S14.3–6, D5b1, P5b6–7:

[S14] [D5b1] rgya gar skad du / ārya nai ra ātma¹ pa ri pritstshā nā² ma ma hā yā na sū
tra /

bod skad du / 'phags pa bdag med pa dris pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo /
sangs rgyas dang byang [P5b7] chub sems dpa' thams cad la phyag 'tshal lo //

¹ ātma] S, ad ma Y Li P N C, atma Zh. ² nā] S, na N.

【帰敬】

《梵文和訳》 オーム, ブッダに帰命します.

《法天訳》 T. 17, no. 846, 934a17-20 :

外道問聖大乘法無我義經

西¹ 天譯經² 三藏朝散大夫試鴻臚少卿傳教大師臣³ 法天奉 詔譯⁴

¹ (宋) + 西<明>. ² [譯經] - <明>. ³ [臣] - <明>. ⁴ ((西天... 譯)) 二十四字 = ((三藏傳教大師臣法天奉詔譯)) 十二字<宮>.

《日称等訳》 T. 32, no. 1643, 172a14-18 :

尼乾子問無我義經

馬鳴菩薩集

西天譯經三藏朝散大夫試鴻臚少卿宣梵大師賜紫沙門臣日称等奉 詔譯

《Skt.》 Ms18r1–6, L209.8–13, V174.2–6:

[V174] atha te tīrthikā upalaṃbhadṛṣṭayaḥ savikalpāḥ savitarkā mahāyānikam u_[18r2]pasṛtya
sādarakṛtāñjalipuṭā nairātmaprasnaṃ paripṛcchanti¹ sma // nairātmakaṃ² śarīram iti
kulapu_[18r3]tra sarvajñena nirdiśyate / yadi śarīraṃ nairātmakaṃ paramātmā na
vidyate tat kasmā_[18r4]t sakāśād ete hasitaruditakrīḍitakrodhamānersyāpāisunyaḍayaḥ
samutpadyante³ / _[18r5]tad asmākaṃ⁴ saṃdehaṃ mocayitum arhati bhavān⁵ / kim asti
śarīre paramātmā kiṃ vā _[18r6]nāstīti⁶ //

¹ paripṛcchanti] L V, paripṛcchati Ms. ² nairātmakaṃ] L V, nairātma Ms. ³ samut-
padyante] L V, samutpadyate Ms. ⁴ asmākaṃ] L V, āsmākaṃ Ms. ⁵ bhavān] em. (cf.
khyod kyis, 仁者), bhagavān Ms L V. ⁶ nāstīti] Ms, nāsti L V.

《Tib.》 S14.6–15.1, D5b1–4, P5b7–6a2:

de nas dmigs pa'i lta ba can _[D5b2]rnam par rtog pa dang bcas shing rnam par dpyod pa
dang bcas pa'i mu stegs pa de dag rnams theg pa chen po'i¹ nang du song ste / _[P5b8]zhe
sa dang bcas shing thal mo sbyar nas bdag med pa'i dri ba dag yongs su dris pa / rigs
kyi bu thams cad mkhyen pas ni lus la bdag med do zhes _[D5b3]gsungs la / gal te lus la
yang dag par bdag med na ji ltar na _[P6a1]de las rtse² ba dang / dgod³ pa dang / ngu
ba dang / rol ba dang / khro ba dang / nga rgyal dang / phrag dog dang / phra ma la
sogs pa kun tu 'byung bar 'gyur / ci lus la yang dag par na bdag yod dam med _[D5b4]pa
yin / _[P6a2]bdag cag _[S15]gi the tshom⁴ de dag khyod kyis bsal ba'i rigs so //

¹ po'i] S, po bī Y. ² rtse] S, brtse N. ³ dgod] S, rgod C. ⁴ tshom] S, tsom Y Li P C.

【我の有無を問う】

《梵文和訳》さて、有所得の思想をもち、分別をもち、理屈っぽい、彼ら異教徒たちは大乘教徒に近づいてから、恭しく合掌して、無我に関する質問をした。「善男子よ、『身体は無我である』と一切智者によって教え示されました。もし身体が無我であり、最高我が存在しないのならば、そのとき、何に由来して、笑う・泣く・遊ぶ・怒る・おごる・ねたむ・悪口などのこれらのことが生じるのですか。なので、あなたが我々の疑念を晴らしてくださいように—身体の中に最高我が存在するのか、あるいは存在しないのか—。」と。

《法天訳》T. 17, no. 846, 934a21–27：

如是我聞。一時佛在大衆中。爾時外道，有疑，欲決，迷大乘行。來至佛所，稽首恭重，合十指掌，問無我義。「大丈夫。是一切智常說此身無我。若身無我本性亦無。云何說有哀・啼・戲・笑・憎・愛・兩舌等事。當何所生。是我所疑。願賜除斷¹。如來所言，身與本性，有無云何。」

¹ 〔斷〕—＜宋＞＜元＞。

《日称等訳》T. 32, no. 1643, 172a19–24：

爾時，尼乾子等，心懷，異見，發起疑惑，尋求，往詣解大乘者所，到已，作禮合掌恭敬，問無我義，使除暗鈍。「如佛所說爲我開示。若說此身無有我者，彼最上我亦無所有，何故身中現見啼・笑・嬉・戲・忿・怒・我慢・嫉妬・兩舌等事。於有於無不能決了。唯願仁者爲我除斷。」

《Skt.》 Ms18r6–v5, L209.13–21, V174.7–14:

mahāyānikāḥ prāhuḥ // na khalu¹ mārṣāḥ² śarīre paramātmā astīty ucyate /
 na hi nā_[18r7]stīti / dvayam atra nocyate / asti paramātmety ucyamāne mārṣā³
 mithyāpralāpaḥ / yady asti tat kathaṃ mā_[18v1]rṣāḥ keśanakhadantacarmaromaśirā⁴-
 mānsāsthimedamajjasnāyupliḥāntranāla⁵-śiraḥkaracaraṇāṃgasa_[18v2]kalaśarīraṃ⁶
 sabāhyābhyantaraṃ⁷ vicāryamāṇaṃ⁸ na dṛśyate paramātmā //
 tīrthikāḥ prāhuḥ // na dṛśyate kula_[18v3]putra paramātmā māṃsacakṣuṣo⁹ vayaṃ na
 paśyāmaḥ / kadācid divyacakṣuṣaḥ paśyanti //
 mahāyā_[18v4]nikāḥ prāhuḥ // na mārṣā divyacakṣuṣo pi paśyanti / yasya na varṇo na
 rūpaṃ na saṃskārās¹⁰ tat ka_[18v5]thaṃ dṛśyate //

¹ na khalu] Ms, om. L V. ² mārṣāḥ] Ms V, mārṣā L. ³ mārṣā] Ms V, mārṣāḥ L. ⁴ -śirā-]
 L V, -śiro- Ms. ⁵ -āntranāla-] L V, -āṃtrannāla- Ms. ⁶ -śarīraṃ] Ms, -śarīre L V. ⁷
 sabāhyābhyantaraṃ] Ms, sabāhyābhyantare L, sa bāhyābhyantare V. ⁸ vicāryamāṇaṃ]
 Ms, vicāryamāṇe L V. ⁹ māṃsacakṣuṣo] Ms, māṃsacakṣuṣā L V. ¹⁰ saṃskārās] L V,
 saṃskāra Ms.

《Tib.》 S15.1–14, D5b4–7, P6a2–6:

theg pa chen po pa rnam kyis smras pa / grogs po dag lus la ni bdag yang dag par yod
 do zhe 'am / med do zhes gnyi kar¹ yang 'dir brjod par mi bya ste / _[P6a3] yang dag par
 yod do zhes _[D5b5] brjod pa na med do zhes brjod pa ni log par smra ba'o // gal te yod
 na² ji ltar na de skra dang / sen mo dang / pags³ pa dang / mgo bo dang / sha dang /
 rus pa dang / rkang dang / tshil dang / rgyus pa dang / _[P6a4] mchin pa dang / rgyu⁴ ma
 dang / mid pa dang / lag pa dang / rkang pa _[D5b6] dang / yan lag dang / nying lag la
 sogs pa lus thams cad kyi phyi dang nang du bcas pa la rnam par brtags na bdag yang
 dag par mi snang ngo //
 mu stegs _[P6a5] pa rnam kyis smras pa / lha'i mig dang ldan pa 'ga' zhig gis mthong gis⁵ /
 bdag cag rnam ni sha'i mig _[D5b7] can yin pas bdag yang dag par ji ltar mthong / theg
 pa chen po pa rnam kyis smras pa / lha'i mig _[P6a6] dang ldan pa rnam kyis kyang mi
 mthong ste / gang la kha dog med pa dang / gzugs med pa dang / dbyibs med pa de ji
 ltar mthong bar 'gyur /

¹ gnyi kar] S, gnyis kar N Zh. ² na] S, pa C. ³ pags] S, lpags Y Li P. ⁴ rgyu] S, sgyu Y N
 Zh. ⁵ gis] S, gi Zh.

【我が有る場合の誤謬の指摘】

《梵文和訳》大乘教徒たちは答えた。「諸賢よ、実に身体の中に最高我が存在するとは〔一切智者によって〕述べられていません。また存在しないとも述べられていません。ここにおいて両者は述べられていません。諸賢よ、最高我が存在すると述べた場合は虚妄な戯言になってしまいます。もし存在するならば、その場合、諸賢よ、どうして髪・爪・齒・肌・体毛・脈・肉・骨・脂肪・髓・筋・脾臓・腸・血管・頭・手・足・四肢・全身が外と内を合わせて観察されるときⁱ、最高我が見られないのでしょうか。」

異教徒たちは答えた。「善男子よ、最高我は見えません。肉眼をもつⁱⁱ我々は見ない〔けれども〕、天眼をもつ者たちはいつでも見るのです。」

大乘教徒たちは述べた。「諸賢よ、天眼をもつ者も見ません。あるものに色彩がなく、形がなく、諸行がない場合、それはいかにして見られるのでしょうか。〔いや見られません。〕」

《法天訳》T. 17, no. 846, 934a27–b6：

佛言。「外道。諦聽諦受。當爲汝説。」

佛言。「身與本性。體本空故。說或有或無。斯成二法。言是有者。斯更虚妄。」

佛言。「當觀¹ 全身・髪・甲・皮・毛・兩手・雙足。至於脂・筋・脾・腸・骨・髓・等事。周遍内外。不見本性。」

外道言。「大丈夫。若彼不見本性。以我肉眼云何能見。或以天眼而能見乎。」

佛言。「天眼見彼。無色・無相・無住。此見非見。」

¹ 當觀＝觀當＜宋＞。

《日称等訳》T. 32, no. 1643, 172a24–b2：

解大乘者謂尼乾子言。「汝先所執最上我者決定虚妄。以何名有。以何名無。於此二中都無所得。若以自身髪・甲・皮・肉・筋・骨・脂・髓・腸・胃・手・足一切身肢爲最上我。内外尋求何有可見。」

時尼乾子白智者言。「我以肉眼故不能見。餘有天眼彼可得見。」

智者曰。「亦非天眼之所能見。彼非顯色。亦非形色。自性空故。何有可見。」

ⁱL 本は、「全身が外と内を合わせて観察されるとき」の箇所を絶対処格の構文で読む。ここでは同一文章内に主格が2つ（-śarīram と paramātmā）現れているので、古典文法としては L 本の方がきれいであるが、本稿では写本の読みを尊重した。

ⁱⁱL 本及び V 本は「肉眼によって（māṃśacakṣuṣā）」と読むが、次の文に出る「天眼をもつ者たち（divyacakṣuṣaḥ）」に合わせて「肉眼をもつ者たち（māṃśacakṣuṣo）」という写本の読みを採用した。

《Skt.》 Ms18v5–7, L209.21–24, V174.15–18:

tīrthikāḥ prāhuḥ // kiṃ nāsti //

mahāyānikāḥ prāhuḥ // nāstīty ucyamāne mārṣā [18v6] mithyāpralāpaḥ / yadi nāsti tat
katham asya te¹ hasitaruditakṛḍitakrodhamānerṣāpaiśunyāda[18v7]yaḥ saṃbhavanti /
tena nāstīti vaktuṃ na pāryate / ubhāv etau dvau nocyete² //

¹ te] V (=Tib. Chi.), ete L, na te Ms. ² nocyete] L V, nocyate Ms.

《Tib.》 S15.14–21, D5b7–6a2, P6a6–b1:

mu stegs pa [D6a1] rnams kyis smras pa / ci med pa yin nam /

theg pa chen [P6a7] po pa rnams kyis smras pa / med do zhes brjod pa na yod do zhes
brjod pa ni log par smra ba'o // gal te med na ji ltar 'di mngon sum du yod par rtse¹
ba dang / dgod² pa dang / ngu ba dang / rol pa dang / [D6a2] khro ba dang / nga rgyal
dang / [P6a8] phrag³ dog dang / phra ma la sogs pa kun tu 'byung bar 'gyur / de bas na
med do zhes brjod⁴ par yang mi rung ste / yod dam med ces gang 'di ltar brjod par mi
bya ste / nyes pa 'di yod pas na yod pa'o zhe'am / med pa'o zhes [P6b1] brjod par mi
bya'o //

¹ rtse] S, brtse N. ² dgod] S, rgod Y P C. ³ phrag] S, phra Y P. ⁴ brjod] S, om. Y Li P N
C Zh.

【我が無い場合の誤謬の指摘】

《梵文和訳》異教徒たちは述べた。「[それでは、最高我は] 存在しないのですか。」
 大乘教徒たちは答えた。「存在しないと述べた場合、諸賢よ、虚妄な戯言になってしまいます。
 もし存在しないならば、その場合、どうして、そのもの（身体）に笑う・泣く・遊ぶ・怒る・
 おごる・ねたむ・悪口などのそれらのことが[現に] 生じているのですか。それゆえ、存在し
 ないと言うことはできません。それら2つともは[一切智者によって] 述べられていません。」

《法天訳》T. 17, no. 846, 934b6–9：

外道言。「若如是説，大聖妄語。若彼非者，云何現見，有此啼・笑・嬉・戲・瞋怒・憎愛・兩舌
 等事。以如是故，何得説無。又説或有或無，斯成二義。」

《日称等訳》T. 32, no. 1643, 172b2–5：

尼乾子言。「彼定無耶。」

智者曰。「若説無者，云何現見，從因縁生啼・笑等相。或説爲有，或説爲無，二皆邪妄。非其
 正理。」

《Skt.》 Ms18v7–19r3, L209.24–28, V174.19–23:

tīrthikāḥ prāhuḥ // yadi kula_[19r1]putra nocyate astīti vā nāstīti vā tat kim
atrāvalambanaṃ¹ bhavatu //
mahāyānikāḥ prāhuḥ // na mārṣā_[19r2] kiṃcid avalambanaṃ² bhavati //
tīrthikāḥ prāhuḥ // kiṃ śūnyam ākāśam iva //
mahāyānikāḥ prāhuḥ // eva_[19r3]m etat mārṣāḥ evam etat śūnyam ākāśam iva //

¹ atrāvalambanaṃ] Ms, atrāmbanaṃ L V. ² avalambanaṃ] Ms L, āmbanaṃ V.

《Tib.》 S15.21–16.5, D6a3–4, P6b1–2:

_[D6a3] mu stegs pa rnams kyis smras _[S16] pa / 'o na 'dir gang zhig dmigs par 'gyur /
theg pa chen po pa rnams kyis smras pa / dmigs par gyur pa ni ci yang med do //
mu stegs pa rnams kyis smras pa / ci nam _[P6b2] mkha' ltar stong pa nyid yin nam /
theg pa chen po pa rnams kyis _[D6a4] smras pa / grogs po dag / de de bzhin te / nam
mkha' ltar stong pa nyid yin no //

¹ do] S, de Y P. ² te] S, de Li N Zh.

【身体を支えているものは何か】

《梵文和訳》異教徒たちは述べた。「善男子よ、もし〔我が〕存在するとも、存在しないとも述べられていないのならば、ここで何が支えとなるのでしょうか。」

大乘教徒たちは答えた。「諸賢よ、支えなどというものは何もあります。」

異教徒たちは述べた。「虚空のように〔支えは〕空なののでしょうか。」

大乘教徒たちは答えた。「諸賢よ、まさにその通りです。まさにその通りです。虚空のように〔支えは〕空なのです。」

《法天訳》T. 17, no. 846, 934b9–12 :

又言、「大丈夫、若彼有無不得説者、云何説言、『彼有所著、彼無所著』。」ⁱ

又言、「空者、當何所如。」

佛言、「如是、如是。空非所如。體不可得故。」

《日称等訳》T. 32, no. 1643, 172b5–8 :

尼乾子言、「若有若無俱不應説、如何此身現有所住。」

智者曰、「無有少分見所住相。」

尼乾子言、「若無住著即同虚空。」

智者曰、「如汝所説如虚空故。」

ⁱ法天訳「彼無所著」は、梵文テキスト、日称等訳、藏訳において、大乘教徒による答弁となっている。

《Skt.》 Ms19r3–v1, L209.28–210.3, V174.24–29:

tīrthikāḥ prāhuḥ // yady evaṃ kulaputra tad ete ha_[19r4]sitaruditakrīḍitakrodhamānersyā-
 paiśūnyādayaḥ katham draṣṭavyāḥ //
 mahāyānikāḥ prāhuḥ // mā_[19r5]yāsvapnendrajālasadr̥śā draṣṭavyāḥ //
 tīrthikāḥ prāhuḥ // kīdr̥śī māyā kīdr̥śaḥ¹ svapnaḥ kīdr̥śaḥ indrajā_[19r6]la iti //
 mahāyānikāḥ prāhuḥ // _[L210] upalakṣaṇamātraṃ² māyā agrāhyā / pratibhāsamātraṃ³
 svapnaḥ / prakṛtiśūnya_[19v1]tāsvarūpa indrajālaḥ kṛtrimaprayogaḥ⁴ / evaṃ mārṣāḥ sarve
 māyāsvapnendrajālasadr̥śā⁵ draṣṭavyāḥ /

¹ kīdr̥śaḥ] L V, kīdr̥śī Ms. ² upalakṣaṇamātraṃ] L V, upalakṣaṇamātra Ms. ³
 pratibhāsamātraṃ] L V, pratibhāsamātra Ms. ⁴ kṛtrima-] L V, kṛtima- Ms. ⁵
 māyāsvapnendrajālasadr̥śā] Ms, svapnamāyendrajālasadr̥śā V, svapnendrajālasadr̥śā L.

《Tib.》 S16.5–15, D6a4–7, P6b2–6:

mu stegs pa rnam kyis smras pa / gal te de ltar yin na rtse ba dang / dgod¹ _[P6b3] pa
 dang / ngu ba dang / rol pa dang / khro ba dang / nga rgyal dang / phrag dog dang /
 phra ma la sogs pa ji ltar _[D6a5] blta bar bgyi /
 theg pa chen po pa rnam kyis smras pa / sgyu ma dang / rmi lam dang / mig 'phrul
 dang 'dra ba nyid² yin no //
 mu stegs _[P6b4] pa rnam kyis smras pa / sgyu ma ni ji lta bu lags / rmi lam dang / mig
 'phrul ni ji lta bu lags /
 theg pa _[D6a6] chen po pa rnam kyis smras pa / sgyu ma ni mtshon ba tsam mo // rmi
 lam ni so sor snang ba tsam ste / gzung bar bya ba _[P6b5] ma yin zhing rang bzhin gyis
 stong pa / yod pa ma yin pa'i ngo bo nyid do // mig _[P6b6] 'phrul ni / bcos ma tsam du
 dgos pa'o // grogs po dag de de bzhin _[D6a7] te³ / dngos po ji snyed pa thams cad ni sgyu
 ma dang / rmi lam dang / mig 'phrul dang 'dra bar shes par bya'o //

¹ dgod] S, rgod Y P C. ² nyid] S, om. Y Li P N C Zh. ³ te] S, de Li N C Zh.

【一切はまぼろしのごとし】

《梵文和訳》異教徒たちは述べた。「善男子よ、もしそうであるならば、その場合、なぜ笑う・泣く・遊ぶ・怒る・おごる・ねたむ・悪口などのそれらのことが見られるのですか。」

大乘教徒たちは答えた。「[笑うことなどは] まぼろしと夢と幻術に似ていると見るべきです。」

異教徒たちは述べた。「まぼろしとはいかなるものであり、夢とはいかなるものであり、幻術とはいかなるものであるのですか。」と。

大乘教徒たちは答えた。「まぼろしとは[何かを] 単に暗示するものにすぎず、つかみどころのないものです。夢とは[何かを] 単に顕れているにすぎないのです。幻術とは人為的な営みです。[いずれも] 本性空性を本質としています。このように、諸賢よ、全てのものは、まぼろしと夢と幻術に似ていると見るべきです。」

《法天訳》T. 17, no. 846, 934b12-17:

外道言。「若此者、笑・哭・嬉戯・瞋怒¹・憎愛・兩舌等事、當何所見。」

佛言。「如夢、如幻、如化、如影像相。」

外道言。「云何夢相、云何幻化相、云何影像相。」

佛言。「幻化非相、空非執持。夢本體空、如陽焰故。影像無色、虛假不實。如是所見、乃至一切事、皆如幻、如化、如夢、如影。當如是見。」

¹ 怒=怨<宋>.

《日称等訳》欠

《Skt.》 Ms19v1–5, L210.3–7, V174.30–175.3:

puna_[19v2]r aparaṃ dvau bhedaṃ vinirdiṣṭau, yad uta saṃvṛtiḥ paramārthaś ca / tatra saṃvṛtir nāma, ayam ātmā, ayam _[V175] pa_[19v3]raḥ, evaṃ jīvaḥ puruṣaḥ pudgalaḥ kārakaḥ vedakaḥ dhanaputrakalatradikalpanā yā sā saṃvṛti_[19v4]r nāma / yatra nātmā na paraḥ, evaṃ na jīvo na puruṣo na pudgalo na kārako na vedako na dha_[19v5]naṃ (以下梵文テキスト欠) *bu med pa dang chung ma med pa dang mdza' bshes med pa dang nye du la sogs pa med pa de ni don dam pa zhes bya'o // gang la rang bzhin* _[P7a] *gyis dngos po thams cad du yongs su brtags shing dge ba dang mi dge ba'i 'bras bu dang skye ba dang 'gag pa ni kun rdzob bo // dge ba dang mi dge ba'i 'bras bu med pa dang skye ba med pa dang 'gag pa med pa de bzhin nyid kyi ngo bo nyid de la ni kun nas nyon mongs pa dang rnam par byang ba med de /* (以上梵文テキスト欠) *sā madhyamā pratipattir dharmāṇām /*

《Tib.》 S16.15–17.7, D6a7–b4, P6b6–7a2:

gzhan yang kun rdzob¹ dang / don dam pa dag bstan par bya ste / de la kun rdzob ces bya ba ni 'di ni bdag go / 'di ni gzhan no zhes bya ba dang / srog dang / skyes bu _[D6b1] dang / gang zag dang / _[P6b7] byed pa po dang / tshor ba po dang / nor dang / bu dang / chung ma dang / mdza' bshes dang / nye du la sogs par rtog pa de ni kun rdzob ces bya'o // gang la bdag med pa dang / gzhan med pa dang / srog med pa dang / skyes bu med pa dang / _[P6b8] gang zag med pa dang / _[D6b2] byed pa po med pa dang / tshor ba _[S17] po med pa dang / nor med pa dang / bu med pa dang / chung ma med pa dang / mdza' ba shes med pa dang / nye du la sogs pa med pa de ni don dam pa zhes bya'o // gang la rang bzhin _[P7a1] gyis dngos po thams cad du yongs su brtags shing dge ba dang / mi dge _[D6b3] ba'i 'bras bu dang / skye ba dang / 'gag pa ni kun rdzob bo // dge ba dang / mi dge ba'i 'bras bu med pa dang / skye ba med pa dang / 'gag pa _[P7a2] med pa de bzhin nyid kyi ngo bo nyid de la ni kun nas nyon mongs pa dang / rnam par byang ba med de / de ni dbu ma'i chos rnam kyi sgrub pa _[D6b4] lhur len pa'o //

¹ rdzob] S, brdzob Li.

【二諦】

《梵文和訳》「さらにまたⁱ、2種類の区別が説示された。すなわち世俗と勝義である。このうち、世俗というのは、『これは[私]自身であり、これは他人である』[という分別であり]、同様に、『[これは] ジーヴァ、プルシャ、プドガラ、作者、受者であり、[これは私の] 財産、子供、妻である』などという分別が、世俗というものである。あるものについて、『[これは私]自身でなく、他人でもない』[とし]、同様に、『[これは] ジーヴァ、プルシャ、プドガラ、作者、受者ではなく、[これは私の] 財産、(以下梵文テキスト欠、蔵訳によって和訳を補う) 子供、妻、友、親族ではない』など[の理解]があるとき、それが勝義というものである。

あるものについて、本質的に全面的に吟味された場合、善・不善の果や、生・滅があれば、世俗である。善・不善の果がなく、生・滅もなく、真如の本性があれば、そこには汚染や浄化がない、(以上梵文テキスト欠)それが諸法の中道である。」

《法天訳》T17, no. 846, 934b18–26 :

「復次有二種見。莊嚴、眞如。彼莊嚴者、此即名我、此即名他。是名人補特伽羅、名人世間思惟、至於資財・男女・兄弟・妻妾等名心所思惟莊嚴。彼如是法。無自・無他・無人・無命・無補特伽羅・無有情・無世間・無見者・無資財・無男女・無朋友・無妻妾等。彼一切事不見自性。云何彼出世間莊嚴果報。善惡生滅。彼眞如莊嚴果報。無善、無惡、不生、不滅、無煩惱、無快樂。而彼諸法各各如是。」

《日称等訳》T32, no. 1643, 172b9–17 :

「智者曰：「於是義中而有二種。一者世俗、二者勝義。依世俗説則有自、他、命者・士夫・補特伽羅・作者・受者、財寶・妻・子・親眷・朋屬。如是差別。依勝義説則無自他命者乃至朋屬等事。亦無少分差別等相。若世俗説則有生滅善惡果報。若勝義中則無生滅善惡果報。彼眞如法自性清淨、無有煩惱、無有染汚、亦無覺了、本來寂靜。此說是名眞如自性」。

ⁱこの次の文章の主語は、漢訳「智者」である。

《Skt.》 Ms19v5–20v2, L210.7–28, V175.3–24:

tatredam ucyate /
 samvṛtiḥ paramārthaś ca dvau bhedaḥ samprakāśitau ^[19v6] /
 samvṛtir laukiko¹ dharmaḥ paramārthaś ca lokottaraḥ // 1
 samvṛti-r-dharmam² āpannāḥ sattvāḥ kleśavaśānugāḥ /
 ci^[20r1]raṁ bhramanti saṁsāre paramārtham ajānakāḥ // 2 //
 samvṛtir laukiko³ dharmaḥ atas⁴ taṁ kalpayanty apaṇḍitāḥ /
 abhūta^[20r2]parikalpanād duḥkhāny anubhavanti te // 3 //
 muktimārgaṁ na paśyanti andhā bālāḥ pṛthagjanāḥ /
 utpadyante niru^[20r3]dhyaṇte ajasraṁ gatipañcasu // 4 //
 bhramanti cakravan mūḍhā lokadharmasamāvr̥tāḥ /
 paramārthaṁ na jānanti ^[20r4] bhavo yatra nirudhyate /
 veṣṭitā bhavajālena saṁsaranti punaḥ punaḥ // 5 //

¹ laukiko] L V, lokiko Ms. ² samvṛti-r-dharmam] Ms.(*metri causa*), samvṛtidharmam L V. ³ laukiko] L V, lokiko Ms. ⁴ atas] Ms, [atas] L, om. V.

《Tib.》 S17.8–18.9, D6b4–7a3, P7a2–b2:

de la 'di skad ces bya ste /
 kun rdzob dang ni don dam¹ ste // dbye ba gnyis su yang ^[P7a3] dag bshad //
 kun rdzob 'jig rten pa yi² chos // don dam 'jig rten 'das pa'o // (1)
 kun rdzob chos la zhugs pa yi // sems can nyon mongs dbang du 'gro /
 don dam ^[D6b5] yongs su ma shes pas // 'khor bar yun ring 'khor bar ^[P7a4] 'gyur // (2)
 kun rdzob 'jig rten chos rnam la // mi mkhas³ pa dag rtog par byed //
 kun tu rtog pa de yis ni // sdug bsngal nyams su myong bar 'gyur // (3)
 ji ltar so so'i skye bo yi // byis pas grol lam mi ^[D6b6] shes pas //
 mi zad ^[P7a5] pa yi⁴ sdug bsngal dag // mang po rjes su myong bar 'gyur //
 gang du srid pa 'gag 'gyur ba'i // don dam dag ni mi shes pas //
 skye ba dang ni 'gag 'gyur zhing // skye med 'gro dang 'ong bar 'gyur //
 'jig rten chos la gnas pa ^[P7a6] yi // blun po ^[D6b7] 'khor lo bzhin du 'khor //
 sdug bsngal gnas can 'khor ba 'dir // yang dang yang du 'khor bar 'gyur // (4–5)

¹ dam] S, dam pa Li P. ² pa yi] S, pa'i Y Li P. ³ mkhas] S, 'khas Li. ⁴ zad pa yi] S, zad pa'i Y Li P, bzad pa yi Zh.

【偈頌】【k. 1 二諦の総説】【kk. 2-10 世俗と輪廻】

《梵文和訳》それについて次のように言われる。

世俗と勝義という 2 種の区別が明示された。

世俗は世間法であり、勝義は出世間〔法〕である。(1)

世俗の法に入ってしまった有情たちは、煩悩力に率いられ、

輪廻において永い間さまよい続け、勝義について知らないままである。(2)

世俗は世間法である。これゆえ、学なき者たちがそれを分別し、

ありもしないことを構想すること（虚妄分別）によって、彼らは諸苦を経験する。(3)

妄想愚痴の凡夫たちは、解脱への道を見ず、

永遠に五趣の中で生まれては滅する。(4)

世間法に覆われており、輪廻的生存（有）の網によって取り囲まれている愚者たちは、輪廻的生存が滅するところの勝義を知らず、車輪のごとくに、さまよい続け、何度も何度も輪廻する。(5)ⁱ

《法天訳》T. 17, no. 846, 934b26-c11 :

ⁱⁱ又彼世間及出世間二種莊嚴 (1) . 令諸有情因莊嚴故而生煩惱, 處於輪迴久久展轉, 不知眞如 (2) . 彼知法¹者, 思惟莊嚴, 疑此苦受彼苦受, 惡遠離解脱而不見道. 愚癡有情以迷執故輪轉生死墮於惡趣 (3-4) . 行世間法不見眞如. 盡彼輪迴由²如織網用線展轉復去復來 (5) .

¹ 法=<宋> ² 由=猶<元><明>

《日称等訳》T. 32, no. 1643, 172b17-c10.

重明此義以偈頌曰：

世俗勝義諦 二種今當説 世俗即世法 勝義無過上 (1)

有情依世俗 增長於煩惱 久處於輪回 不了勝義法 (2)

由依世俗故 自他生遍計 起分別疑惑 而受諸苦惱 (3)

彼愚癡凡夫 長時受逼迫 不修出離因 何知解脱理

愚人常依止 世間生滅法 馳流五趣中 相續而不斷

由不達勝義 則無滅苦要 展轉受輪回 如蠶自纏縛 (4-5)

ⁱ梵文テキストの kk. 4-5 に対応する藏訳は以下の通りである。「ありのままに異生凡夫たちは、解脱への道を知らないで、尽きることのない多くの苦を経験するのである。輪廻的生存が滅するところの勝義を知らないで、生まれては滅し、不生〔にもかかわらず輪廻を〕往来する。世間法に住する愚者は、車輪のごとくに、さまよい続け、苦の寄る辺を有するこの輪廻において、何度も何度も輪廻する」。なお、下線部は梵文テキストと一致しない。法天訳の kk. 3-4 は訳者の理解に問題が生じていた可能性がある（特に「惡遠離解脱而不見道」の箇所）。

ⁱⁱ他の諸本ではここから偈頌である。なお、「二種莊嚴」は「二種、莊嚴眞如」と読むことは可能か。

yathā candraś ca sūryaś ca [20r5] pratyāgacchati gacchati /
 bhavaṃ cyutiṃ tathā loke punar āyānti yānti ca // 6 //
 anityāḥ sarvasaṃskā[20r6]rā adhruvāḥ kṣaṇabhaṅgurāḥ /
 ataś ca paramārthajño varjayet saṃvṛteḥ padam // 7 //
 svargasthāne tu ye devā gaṇ[20r7]dharvāpsarasādayaḥ¹ /
 cyutir asti ca sarveśaṃ tat sarvaṃ saṃvṛteḥ phalam // 8 //
 siddhā vidyādhara yakṣāḥ kiṇ[20v1]narāś ca mahoragāḥ /
 punas te naraḥ yānti tat sarvaṃ saṃvṛteḥ phalam // 9 //
 śakratvaṃ cakravartitvaṃ saṃprāpya cottamaṃ [20v2] padam /
 tiryagyonau punar janma tat sarvaṃ saṃvṛteḥ phalam // 10 //

¹ gandharvāpsarasādayaḥ] L V, gandharvāś cāpsarādayaḥ Ms.

ji ltar nyi ma zla ba dag // slar yang 'ong zhing 'gro bar byed //
 de bzhin srid par 'pho ba na // slar yang [P7a7] 'ong zhing 'gro bar 'gyur // (6)
 'khor ba thams cad mi rtag [D7a1] cing // mi brtan skad cig¹ 'jig pa nyid //
 de bas don dam shes pa yis // kun rdzob bden pa'i gnas spong ngo // (7)
 mtho ris gnas nas lha rnams dang // dri za lha mi [P7a8] rnams kyang ni //
 kun la 'pho ba yod gyur pa // kun kyang kun rdzob 'bras bu yin // (8)
 [D7a2] grub dang rigs² 'dzin gnod sbyin dang // dri za dang ni lto 'phye rnams //
 slar yang dmyal bar 'gro 'gyur ba // kun kyang kun rdzob 'bras bu [P7b1] yin // (9)
 gang zhig brtson drag lha rnams dang // yon tan 'byung gnas la gnas gang //
 mtho ris las 'pho ltung gyur ba // thams [D7a3] cad kun rdzob 'bras bu yin // (梵文テキスト欠)
 brgya byin 'khor los sgyur³ nyid de // gang gis dam [P7b2] pa'i gnas thob nas //
 slar yang byol song skye gnas⁴ 'jug / thams cad kun rdzob 'bras bu yin // (10)

¹ cig] S, gcig Y P. ² rigs] S, rig Zh. ³ sgyur] S, bsgyur Y P Zh. ⁴ skye gnas] S, skyes nas Li N C.

例えば、月と太陽がやって来たり去ってしまったりするごとくに、
 同様に、世間においてもまた、[人々は] 生存と死没を行き来する。(6)
 一切諸行は、無常であり、恒常ではなく、刹那滅である。
 そして、このことに基づいて勝義を知る者は世俗の境涯を離れるだろう。(7)
 神々や乾達婆や天女などは天界に住するが、[彼ら] 全員には死没がある。
 それは全て世俗の結果である。(8)
 成就者たち、持明者たち、夜叉たち、緊那羅たち、摩羅伽たち、
 彼らはまた、地獄に堕ちる。それは全て世俗の結果である。(9)ⁱ
 また、帝釈天の状態や転輪王の状態という[世俗の中で] 最上の境涯を得た後に、
 畜生に再び生まれる。それは全て世俗の結果である。(10)

又如日月二種行往，晝夜隱顯，出沒世間 (6)．諸行無常不久破壞．輪轉生死來往亦然．而眞如體離莊嚴句 (7)．又彼天人乾闥婆等．及彼女等住於¹天上．以²彼莊嚴果報．墮一切有 (8)．復有持明成就，夜叉緊那羅，摩羅伽³，彼以一切莊嚴果報，復墮地獄 (9)．惡精進天，以彼神通而作功德，以彼一切莊嚴果報，或墮彼天．又若帝釋及轉輪王，具最上德及最上句，以彼一切莊嚴果報，復生傍生 (10)．

¹ 於=彼<明>．² 以=次<三>．³ 伽=加<明>．

亦如於日月 旋轉無休息
 衆生三有中 來往亦如是 (6)
 諸行悉無常 刹那而遷變
 遠離世俗法 當求勝義諦 (7)
 乃至住諸天 及乾闥婆等
 不免彼無常 此皆世俗果 (8)
 夜叉鬼神等 得持明成就
 不免墮惡趣 此皆世俗果 (9)
 帝釋轉輪王 福報無與等
 不免墮傍生 此皆世俗果 (10)

ⁱ 藏訳は、k. 9 の直後に以下の一偈を有する。「激しい精進をする天たちや、徳性の根源に住する[天たち]は、[いづれ] 天から堕ちる。それは全て世俗の結果である」。この偈は法天訳の「惡精進天，以彼神通而作功德，以彼一切莊嚴果報，或墮彼天」に一致する。

《Skt.》 Ms20v2–21r3, L210.29–211.12, V175.25–176.8:

ataḥ sarvaṃ idaṃ tyaktvā divyaṃ svargamahāsukham /
 bhāva_[20v3] yet satataṃ prājño bodhicittaṃ prabhāsvaraṃ // 11 //
 niḥsvabhāvaṃ nirālambaṃ sarvaśūnyaṃ nirālayaṃ /
 pra_[20v4] pañcasamatikrāntaṃ¹ bodhicittasya lakṣaṇaṃ // 12 //
_[L211] na kāṭhinyaṃ na mṛdutaṃ² na coṣṇaṃ naiva śītaṃ /
 na _[20v5] saṃsparśaṃ na ca grāhyaṃ bodhicittasya lakṣaṇaṃ // 13 //
 na dīrghaṃ nāpi hrasvaṃ ca³ na piṇḍaṃ na trikoṇakaṃ /
_[20v6] na kṛṣaṃ nāpi ca sthūlaṃ bodhicittasya lakṣaṇaṃ // 14 //

¹ prapañcasama-] L V, prapañce sama-? Ms. ² na mṛdutaṃ] Ms L, na ca mṛdutaṃ V.

³ nāpi hrasvaṃ ca] Ms, nāpi vā hrasvaṃ L V.

《Tib.》 S18.9–21, D7a3–6, P7b2–6:

de bas mtho ris lha rnam kyī // bden pa bzang po kun spong la //
 byang chub sems ni _[D7a4] 'od gsal ba // rnal 'byor _[P7b3] bas ni rtag tu bsgom // (11)
 dngos po med cing dmigs su med // thams cad stong pa gnas med pa //
 spros pa rnam las yang dag 'das // byang chub sems dpa'i mtshan nyid yin // (12)
 sra ba ma yin 'jam pa min // _[P7b4] dro ba ma yin grang ba min //
_[D7a5] de ni reg min gzung¹ bya min // byang chub sems kyī mtshan nyid yin // (13)
 ring po ma yin thung ba min // zlum po ma yin gru gsum min //
 phra² ba ma yin spom pa'ang min // byang chub sems kyī mtshan _[P7b5] nyid yin // (14)

¹ reg min gzung] S, reg min bzung Li N C, rig min gzung Kh. ² phra] S, 'phra Y.

【kk. 11–18 菩提心】

《梵文和訳》したがって、智者は、この神々の天界における大いなる安樂を全て捨てて、常に輝き続ける菩提心を修習せよ。(11)

無自性，無所縁，一切空，無執着，

戲論を超えたものが，菩提心の特徴である。(12)

堅さがなく，柔らかさがなく，熱さがなく，冷たさがなく，

感触がなく，把握されないのが，菩提心の特徴である。(13)

長くもなく，短くもなく，球状でもなく，三角でもなく，

細かくもなく，粗くもないのが，菩提心の特徴である。(14)

《法天訳》T. 17, no. 846, 934c11–22：

智者於一切時，宜應遠離天上最上大樂，恒觀菩提之心靈明廓澈¹，無自性，無礙，亦無所住，一切皆空，亦復遠離一切戲論（11–12）。外道，菩提心相，不硬不軟，不熱不冷，無觸無執（13）。又菩提心相，非長非短，不圓不方，不肥不瘦（14）。

¹ 澈＝徹＜元＞＜明＞。

《日称等訳》T. 32, no. 1643, 172c11–26：

人天五欲樂 決定當棄捨

於彼菩提心 以惠常觀察（11）

自性無所著 一切悉皆空

超越所戲論 是菩提心相（12）

非剛非柔軟 非熱亦非冷

非觸非執受 是菩提心相（13）

非長及非短 非圓亦非方

非微細非麤 是菩提心相（14）

[V₁₇₆] na śvetam nāpi raktaṃ ca na kṛṣṇam na ca pītakaṃ /
 avarṇam [20_{v7}] ca nirākāraṃ bodhicittasya lakṣaṇam // 15 //
 nirvikāraṃ nirābhāsaṃ nirūhaṃ nirvibandhakam /
 arū[21_{r1}]paṃ vyomasamkāśaṃ bodhicittasya lakṣaṇam // 16 //
 bhāvanāsamatikrāntaṃ tīrthikānām agocaram /
 prajñāpārami[21_{r2}]tārūpaṃ bodhicittasya lakṣaṇam // 17 //
 anaupamyam anābhāsaṃ adṛśyam¹ śāntam eva ca /
 prakṛtiśuddham adravyaṃ bo[21_{r3}]dhicittasya lakṣaṇam // 18 //

¹ adṛśyam] em., adṛśam Ms L V.

(15) (16) は蔵訳に対応偈なし.

sgom pa rnam las rnam 'das¹ shing // mu stegs rnam kyī spyod [D_{7a6}] yul min //
 shes rab pha rol phyin sbyor ba // byang chub sems kyī mtshan nyid yin // (17)
 dpe med bsgom du med pa dang // mthong min gnas kyī [P_{7b6}] mchog gyur la //
 rang bzhin gyis ni rnam dag pa // byang chub sems kyī mtshan nyid yin // (18)

¹ 'das] S, 'dres Kh.

白でもなく、赤でもなく、黒でもなく、黄でもなく、
 色彩をもたず、形状をもたないものが、菩提心の特徴である。(15)ⁱ
 変異なく、顕現なく、変化なく、障害がなく、
 無色であり、虚空の現れをもつものが、菩提心の特徴である。(16)
 異教徒たちの修習を超えており、[異教徒たちの] 対象領域ではなく、
 般若波羅蜜を本質とするものが、菩提心の特徴である。(17)
 喩えようもなく、顕現がなく、見られることがなく、まさに寂靜であり、
 本性清淨であり、実体のないものが、菩提心の特徴である。(18)

又菩提心相，不白不黒，不赤不黄，非色非相（15）．彼菩提心，不作相，非顯耀，無性，無纏
 縛，由如虚空而無色故（16）．菩提心相而離觀察．外道，而汝不知菩提心相，與般若波羅蜜多
 而相應故（17）．又菩提心相，自性清淨，無物無喩，不可觀視，是最上句．又菩提心相，非諸
 物像，無相似者（18）．

非白及非紅 非黒亦非黄
 非形色顯色 是菩提心相（15）
 非色非光明 非動非纏縛
 非住如虚空 是菩提心相（16）
 離思惟觀察 非外道境界
 與般若相應 是菩提心相（17）
 無似無對待 無等常寂靜
 自性本凝然 是菩提心相（18）

ⁱk.13 の「感触がなく」は、k.13ab 句の内容を包括的に表現しており、k.15 の「色彩をもたず、形状をもたない」は、k.14 及び k.15ab 句の内容をそれぞれ包括的に表現している。また、k.13 の「把握されない」は、感触がないことの論理的帰結であろう。

《Skt.》 Ms21r3–7, L211.13–22, V176.9–18:

sarvaṃ ca tena sādṛśyaṃ niḥsāraṃ budbudopamam /
 aśāśvataṃ ca nairātmyaṃ [21r4] māyāmarīcisaṃnibham // 19 //
 mṛtpiṇḍavad ghaṭībhūtaṃ bahuprapaṇcapūritam /
 rāgaḍveśādisaṃyu[21r5]ktaṃ svapnamāyā tu kevalam // 20 //
 abhrāntare yathā vidyut kṣaṇād api na dr̥śyate /
 prajñāpāramitādr̥śṭyā [21r6] bhāvayet paramaṃ padam // 21 //
 krīḍitaṃ hasitaṃ nityaṃ jalpitaṃ ruditaṃ tathā /
 nṛtyaṃ gītaṃ tathā vādyam sarvaṃ svapnopamaṃ hi [21r7] tat // 22 //
 māyāsvapnopamaṃ sarvaṃ saṃskāraṃ sarvadehinām /
 svapnaṃ ca¹ cittasaṃkalpaṃ cittaṃ ca gaganopamam // 23 //

¹ ca] V, [ca] L, om. Ms.

《Tib.》 S18.21–19.9, D7a6–b2, P7b6–8a1:

thams cad dbu¹ ba lta bu ste // chu bur lta bur [D7a7] snying po med //
 rtag pa [S19] ma yin bdag med pa² // sgyu ma smig rgyu³ dag dang mtshungs // (19)
 gong bu [P7b7] bzhin du bsdus gyur pa // spros pa rnams kyis yongs su gang //
 'dod chags zhe sdang la sogs ltar // de ni sgyu ma tshungs 'ba' zhig⁴ yin // (20)
 ji ltar nang na thig le ni // skad cig de la mi [D7b1] mthong ste //
 shes rab pha rol phyin [P7b8] mthong na // de bzhin blo ni 'dus⁵ ma byas // (21)
 rtag tu dgod⁶ cing rtse ba dang // smra zhing glu⁷ dang rol mo dang //
 gzhi la sogs pa'i bde ba⁸ rnams // de dag thams cad rmi lam mtshungs // (22)
 lus can kun gyis 'dus⁹ byas pa // 'di kun rmi lam [P8a1][D7b2] dang mtshungs la //
 rmi lam sems kyi¹⁰ kun rtog ste // sems kyang nam mkha' lta bu yin // (23)

¹ dbu] S, lbu Y P C. ² pa] S, te Li N, de C. ³ smig rgyu] S, mig sgyu Y P, mig rgyu Li N C. ⁴ zhig] S, shig Li C. ⁵ 'dus] S, 'du Y P. ⁶ dgod] S, rgod Y P C. ⁷ glu] S, gru Y Li P. ⁸ bde ba] S, bden pa Y P C. ⁹ 'dus] S, 'du Y P. ¹⁰ kyi] S, kyis N Zh.

【kk. 19–23 一切諸行及び心はまぼろしのごとし】

《梵文和訳》全てのものは、それ（菩提心の特徴）と類似しており、芯を欠き、泡のごとくであり、

恒常でなく、無我であり、まぼろし・陽炎と似ている。(19)

土塊のごとく、水瓶のごとく、多くの戯論で満たされ、

貪・瞋などと相応するが、夢・まぼろしに過ぎない。(20)

雲の中で雷が一瞬間ですら見られないように、

般若波羅蜜を見ないことによってⁱ、最高の境地を修習せよ。(21)

常に、喜び、笑い、眩き、泣き、

踊り、歌い、演奏するというそれら全ては、実に夢のごとくである。(22)

全ての有身者たちにとって一切諸行は、まぼろし・夢のごとくであり、

夢は心に似たものであり、心は虚空のごとくである。(23)

《法天訳》T. 17, no. 846, 934c22–28：

如水成，雖觀非有。如幻化，如陽焰 (19)。喩如泥團作諸器，衆名雖具，咸成戲論。貪瞋癡等，亦幻化有。一味空故 (20)。如電之住刹那不見，觀彼般若波羅蜜多。及作諸善，亦復如是 (21)。至於談笑，嬉戲，歌舞，歡樂，飲食，愛欲，一切如夢 (22)。有情諸行畢竟體空。心喩虚空 (23)。

《日称等訳》T. 32, no. 1643, 172c27–173a5：

如聚沫浮泡 如幻化陽焰

無我亦無常 一切非堅固 (19)

是身如坏器 虚幻而充滿

與三毒相應 畢竟空無有 (20)

如月處雲中 刹那而不現

以甚深般若 達有爲如幻 (21)

衆生器世間 一切皆如夢

由自心分別 彼心亦如夢 (23)

ⁱ 「般若波羅蜜の観点で」という意味を重ねたダブルミーニングで理解することもできる。

《Skt.》 Ms21r7–21v3, L211.23–28, V176.19–24:

bhāvayet _[21v1] ya imaṃ nityaṃ prajñāpāramitānayaṃ /
 sa sarvapāpanirmuktaḥ prāpnoti paramaṃ padaṃ // 24 //
 iyaṃ sānuttarā bodhiḥ _[21v2] sarvabuddhaiḥ prakāśitā /
 bhāvanāṃ bhāvayitveha¹ nirvāṇaṃ labhate śivaṃ // 25 //
 yāvantaḥ saṃvṛter doṣās tāvanto ni_[21v3]rvṛter guṇāḥ² /
 nirvṛtiḥ syād anutpattiḥ sarvadoṣair na lipyate // 26 //

¹ bhāvayitveha] L V, bhāvayitve Ms. ² guṇāḥ] L V, guṇāṃ Ms.

《Tib.》 S19.9–13, D7b2–3, P8a1–2:

gang zhig tshul 'di rtag sgom pa // shes rab pha rol phyin pa'i tshul //
 gang zhig 'di ni rtag sgom pa // dngos po kun _[P8a2] las rnam grol nas // (24)
 go 'phang¹ mchog ni thob par _[D7b3] 'gyur // bla na med pa'i byang chub gang //
 sangs rgyas kun gyis rnam bsgom² pa // bsgoms dang bcas pas 'dzin na ni //
 theg chen 'bras bu 'thob par 'gyur // (25)

¹ 'phang] S, phang Y. ² bsgom] S, bsgoms Y Li P N C Zh.

【kk. 24–26 涅槃の獲得】

《梵文和訳》常にこの般若波羅蜜の道理を修習するならば、
 その者は全ての罪惡を離れ、最高の境地を得る。(24)
 無上菩提とはこのようなものであると一切諸仏によって明示された。
 この世で修習をなした後、吉祥なる涅槃を得る。(25)
 世俗の過失があるだけ、涅槃の徳性がある。
 涅槃が不生であるならば、全ての過失によって汚されることはない。(26)ⁱ

《法天訳》T. 17, no. 846, 934c28–935a6 :

疑當何立。行般若行，恒若此觀了一切性，自然解脫得最上句(24)。諸佛所說無上菩提，由斯生出。當作是觀。作此觀者，得最上涅槃(25)。乃至往昔造作諸過，咸悉除滅¹，生無量徳，而於此生不染諸過(26)。專精觀行決定成就。若與眞如不相應者，應念非²眞如呪及金剛鈴眞如無生印。而起眞如相應之行，決定圓滿如上功德。

¹ 滅=滅<明>。² 「非」の語は削除すべきか。

《日称等訳》T. 32, no. 1643, 173a6–11 :

若人依正理 以恵而修習
 棄背諸障染 速得無上道 (24)
 此最勝般若 諸佛所稱讃
 智者善籌量 勤求無上法 (25)
 離有爲過失 證眞常勝徳
 由此解脫故 一切無染著 (26)

ⁱk. 25 の蔵訳には一部相違が見られ、k. 26 に対応する蔵訳は存在しない。

《Skt.》 Ms21r3–5, L211.29–31, V176.25–27:

atha te tīrthikāḥ tuṣṭā vikalpa_[21r4]rahitāḥ / tadā bhāvanām samādhāya mahāyānajñānalābhino
'bhūvann iti //

mahāyānanirde_[21r5]śe nairātmaparipṛcchā¹ samāptā //

¹ nairātma-] Ms nairātmya- L V.

《Tib.》 S19.13–16, D7b3–4, P8a2–3:

'phags pa _[P8a3] bdag med¹ pa dris pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo rdzogs so² // //
_[D7b4] rgya gar gyi mkhan po ka ma la gub ta dang / zhu³ chen gyi lo tsā⁴ ba dge slong
rin chen bzang pos bsgyur cing zhus te gtan la phab pa⁵ // //

¹ med] S, myed Li. ² so] S, sto Y P. ³ zhu] S, zhus N Zh. ⁴ lo tsā] S, lo tse N, lo ts' Zh. ⁵
pa] S, po Li P N C.

【歡喜奉行】【奥付】

《梵文和訳》そして、彼ら異教徒たちは歡喜し、分別を離れた。その時、修習に専念し、大乘の智を得るに至った。

大乘の説示における無我の問い、完。

《法天訳》T. 17, no. 846, 935a7–10 :

爾時、外道、聞是語已、審諦觀察、而彼疑網¹皆悉除斷。作是觀已、獲住大乘。瞻奉、歡喜、作禮而退。

外道問聖大乘²無我義經

¹ 網＝網＜三＞＜宮＞. ² 大乘＋（法）＜明＞.

《日称等訳》T. 32, no. 1643, 173a12–14 :

時彼外道衆 聞已生歡喜
善觀察除疑 得悟大乘智

尼乾子問無我義經

略号及び参考文献一覧

(略号)

- L Lévi [1928]
 Ms NGMPP A936/11 (fol. 18r1–21v5)
 V Vaidya [1961]
 T 『大正新脩大藏經』

(欧文)

Bhattacharya, Biswanath

- [1966] “A critical appraisal of the Nairātmya-paripṛcchā Ascribed to Aśvaghoṣa,”
*Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd-und Ostasiens und Archiv für indische
 Philosophie* 10, pp. 220–223.

Feer, M. Léon

- [1883] “Nairatma-paripṛccha,” *Fragments extraits du Kandjour, Annales du Musée
 Guimet* 5, pp. 180–186.

Fallick, Eric

- [1999] “The Question of Not-self in the Exposition of the Great Path (attributed
 of Aśvaghoṣa) Translation from Sanskrit of *Nairātmyaparipṛcchā*,” *Buddhist
 Studies Review* 16-1, pp. 1–5.

Kuranishi, Kenichi

- [2012] “On the Manuscript NAK 3/716 (NGMPP A48/11): The
Sadāmnāyānusārīṇī, a Commentary on the Saṃvarodayatantra,” *印度
 学仏教学研究* 60-3, pp. 147–150.

Lévi, Sylvain

- [1928] “Encore Aśvaghoṣa,” *Journal Asiatique*, Oct. – Dec., pp. 193–216.

Mukhopadhyaya, Sujitkumar

- [1931] *Nairātmyaparipṛcchā*, Visva-Bharati Studies, No. 4. Calcutta: Visva-
 Bharati Bookshop.

Tucci, Giuseppe

- [1933] *Rin c'en bzhan po e la rinascita del Buddhismo nel Tibet intorno al Mille*,
Indo-Tibetica No. 2.

Vaidya, P. L.

- [1961] *Mahāyānasūtrasaṃgraha*, Part I, Darbhanga: The Mithila Institute.

de la Vallée Poussin, Louis

- [1934] “Reviews of Books: Sujitkumar Mukhopadhyaya, *Nairātmyapariṣcchā*,” *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, No. 2, Apr., 1934, pp. 355–356.

(和文)

泉芳璟

- [1932] 「外道問聖大乘法無我義經」, 『国訳一切経集部十五』, 大東出版.

金倉円照

- [1966] 『馬鳴の研究』, 平楽寺書店.

加納和雄・李学竹

- [2013] 「梵文『牟尼意趣莊嚴』(Munimatālaṃkāra) 第一章の和訳と校訂—冒頭部—」, 『密教文化』229, pp. 37–63.

川越英真

- [1981] 「Rin chen bzañ po 伝の研究」, 『印度学仏教学研究』59, pp. 31–36.

- [1982] 「Rin chen bzañ po の生涯とその活動」, 『文化』46, 1/2, pp. 44–73.

- [1983] 「Rin chen bzañ po の翻訳リスト」, 『印度学仏教学研究』63, pp. 140–143.

櫻部文鏡

- [1932] 『外道問聖大乘法無我義經』, 香草舎版仏教聖典叢書 10.

常盤大定

- [1905] 『教界文豪 馬鳴菩薩論』, 金港堂.

ツルティムケサン・伴真一郎 (訳注)

- [2010] 「チベットにおける大蔵経(カンギュル・テンギュル) 開版の歴史概観: ナルタンを思い起こすメロディー」, 『真宗総合研究所研究紀要』27, pp. 39–116.

寺本婉雄

- [1912] 「西藏文馬鳴菩薩真俗二諦観」, 『仏教史学』2 編 5 号, pp. 37–48.

中野義照

- [1934] 「尼乾子問無我義經」, 『国訳一切経論集部二』, 大東出版.

藤善眞澄

- [2006] 『参天台五台山記の研究』, 関西大学東西学術研究所研究叢刊 26, 関西大学出版部.

Nairātmaparipṛcchā: Re-editing Sanskrit text collated with Tibetan and Chinese translations

Summary

The present article aims to re-edit the Sanskrit text of the *Nairātmaparipṛcchā*. This text deals with a discourse on the Selflessness between Mahāyāna Buddhists and Tīrthikas. Sylvain Lévi first edited the Sanskrit text, and we shall re-edit it on the basis of Sanskrit palm-leaf manuscript (NGMPP A936/11) that was not utilized by Lévi. Although the Sanskrit manuscript used by Lévi and ours have no significant variants in their readings, there is still a room to improve some readings in the text. We shall also provide an annotated Japanese translation and collate a Tibetan translation and two Chinese translations. Lévi paid attention to the fact that this text is ascribed to Aśvaghōṣa in a Chinese translation, but in view of its contents and style of writing, as Lévi pointed out, it is difficult to ascribe this work to Aśvaghōṣa of the *Buddhacarita*.

<キーワード> *Nairātmaparipṛcchā*, 無我義経, 梵文再校訂, 馬鳴

(平成 30 年度科学研究費補助金 17K02222, 16K13154, 18K00074, 18H03569 による研究成果の一部)